

「つなぐ」「つながる」

— 高度情報通信時代において —

加々美勝久

中学校に勤務していますが、学校の中で「つなぐ」しごとに関わることが多くあります。何をしないで行くかと言いますと、もっぱらコンピュータや情報機器を、LAN（構内ネットワーク）をはじめインターネットともつながるようネットワークでつないでいます。コンピュータ同士を

つなぐとはどんな作業が必要かと言いますと、まず、コンピュータに固有の番号（IPアドレス）をふります。これは世界でただ一つの番号です。自動的に決まる場合もありますし、一台一台ネットワーク管理者が指定する場合もあります。

名前が決まったら、コンピュータ同士が話し合

い（データをやりとり）をするための手順（プロトコル）を決めます。これで、準備完了です。あとは、有線でも無線でも物理的な線につながれば通信ができるようになります。最近はいンターネットが身近になったことで、ネットワークという言葉が、もっぱらコンピュータネットワークと解されることが多くなってきました。ほんの少し前までは、交通網や人脈などに使われていましたが。

さて、コンピュータをつなぐことは意味があるのでしょうか。実は、つながっただけでは何も起りません。もつとも「つなぐ」には二段階あると考えています。初めに述べたのは、本当にコンピュータ同士を線をつないだ状態です。つぎにこの「線をつながった」状態を利用して、データのやりとりができる段階です。たとえば、電話で考えてみますと、今はほとんどの地域で「線につながって」います。さらに、受話器をとりダイヤル

して相手が電話に出た時点で、「つながった」ことになる段階です。もつとも、そこで「もしもし」とか、「こんにちは」などと言わなければコミュニケーションがはじまりません。コンピュータも同じで、線をつなぐだけでなく、コンピュータ同士を起動しそこに流れるデータがなければつながったことにはなりません。ここでは、第二の段階を中心にふれていきたいと思います。

学校に設置されているコンピュータがつかると、どんなことができるのでしょうか。うち中学校では、各教室にあるコンピュータはいンターネットにもつながっています。もちろんコンピュータ室にあるものや教員が利用しているものもつながっています。また、これらのコンピュータ同士もつながっています。それにより、校内的には、ある部屋にあるプリンタが校内のどこからでも利用できたり、特別のコンピュータを決め

て、そのハードディスクの中にデータを蓄え、たとえばワープロの文書ファイルや出納簿ファイルの共有を行うこともできます。

本校では、子ども達は、日常的にインターネットを利用していますが、使い方は様々です。そもそも、ネットワークにつながったコンピュータを各教室に置いたのは二つの意味があります。一つは、できるだけ早くコンピュータネットワーク環境を経験させるため。すなわち、社会では広く使われ始めていることを学校教育の中にも取り入れ、身近な存在とし、学校が環境的に社会から取り残されないようにと設置しました。もう一つは、実際にネットワークにつながったコンピュータを使うことによつて、コンピュータネットワーク上でできること・できないこと・してはいけないことを生徒が実際に体験する必要があると思つたからです。

さて、このような環境が作られると、コンピュータを通して簡単に教室が社会とつながってしまいます。簡単に世界のどの地域ともつながることができます。たとえば、こんなことがあります。子ども達が、自分で調べている内容に対して、既存の資料では十分に明らかにできない場合に、自分たちで企業や研究室に電子メールで問い合わせ、それに対して先方からきちんと回答の電子メールをいただくことができました。実際に最新の内容を手に入れています。このように直接教室の生徒に外部からの回答がなされる経験は、学校教育の中でまだあまり対応が研究されていません。

「開かれた学校」という言



葉がありますが、この言葉が使われ始めた頃は、このような形でコンピュータネットワークでつな
がれ「開かれる」ことは視野になかったと思いま
す。しかし、着実に社会とのつながりを持った教
室が出現しています。さらに、多くの学校がこの
ような環境が整備できれば、子ども達同士の交流
や授業での相互利用が簡単に可能になります。

また、家庭においても電話線などを利用しての
インターネットなどの利用ができる環境があれ
ば、簡単に地域が違う子ども達との交流ができま
す。たとえば、職場の同僚など親が了解している
場合には、その子ども同士が年齢が違っていて
も、電子メールなどで交流することもできます。
文字を通してのやりとりが多いので小学校入学前
の子どもなどは親の力を借りますが、中学生や高
校生と交流しています。地域的に異年齢集団を組
みにくい場合には、電話とは違う形のコミュニ

ケーションが成立し新しい方向性を持つかもしれ
ません。

最近、世の中でも、この「つなぐ」とか「つな
がる」と言う言葉をよく耳にします。これは一つ
には携帯電話やPHSなどの普及が大きいと思い
ます。移動しながらどこでも利用できることが
大きいと思います。ビジネスマンだけでなく、ど
こでも電子メールを利用できる環境を持っている
人間が増えていると思います。わたしも、PDA
(携帯情報端末)と、PHSとで歩きながらでも
電子メールの発信者と表題などは読み、必要に応
じて本文を参照することがあります。いつでもつ
ながっていることをよい方向で利用しない手はな
いですね。その他のサービスでは、PHSを利用
して子どもやお年寄りがどこにいてもわかるシス
テムなども、家庭とのつながりをいつももつこと
ができるシステムだと思います。

ところで、今までみてきたように、いろいろなものをつないだりそれによってつながったりするものが多くなっています。情報化時代といわれる前は、目に見えないものでつながっていることが多かったと思います。ある意味では、「しぼり」だったのかもしれないし、気持ちの中のつながりだったのかもしれない。絆としてのつながりかもしれません。考えようによっては強いつながりをもてたのかもしれない。それに比べると、今は広く浅くなる可能性もあります。大都市では、親子や地域を越えたつながりができるのに、身近な人たちとはつながらないという現象も起きています。

逆にどこに行ってもつながっているということ、常に会社などにつながっている組織とつながっていると考えると、ぞっとするときもあります。「つなぐ」ことのできるものは「切る」こと

もできると考えておくことも大切かもしれません。

最後に、はじめの話題に戻りますが、電話システムの発明者や一番はじめに電話の環境を整えた人は評価されます。しかし、その後は電話の線を設置するだけでは評価されることはなく、それを使ってどんな仕事をしたかに評価は変わってきます。コンピュータネットワークの評価も今後はその方向になっていくと思います。つながったら教育でなができるかを考えながら実践していきたいと思います。

(お茶の水女子大学附属中学校)